

## 日本の人類学による中国研究の現状と可能性

田村和彦

(福岡大学人文学部教授)

ただいま、ご紹介にあずかりました田村です。福岡大学から参りました。今日のご発表を聞いていて、学問の大先輩であり、経験もご豊富な先生方を前にして、私のような若輩者が、このような大きなテーマで語るのは、大変気後れして恐縮ですが、しかし、後ろでいくつかの提案を言うために、必要なことなので、ご容赦いただければ幸いです。

私は、もともと日本の調査から始めました。1993年からですが、先ほど高先生のお話にありました新潟県佐渡島、トキが放鳥をされているところですが、ここのある村で調査を始めました。方法というのは、最初は民俗学の方法で始めたのですが、そのうちに文化人類学の方法に変わってしまいました。そして、1993年から今まで、できるだけ毎年足を運ぶという調査をしておりました。

調査を始めたとき、こちらの人口は 239 人で、世帯数が 94 世帯でしたが、現在では、いわゆる限界集落になってしまうほどに、非常に人口も減っております。平成 27 年の国勢調査のときには、既に人口 143 人で 64 世帯しかない状況です。最初の頃は、写真にあるように、祭りなどの調査をしていたのですが、それでは足りないと思ひまして、その後、人々の生活の記憶や生活技術みたいなものに発展していくことになりました。

(スライド)

次に、中国の調査は 2000 年から始めました。1999 年から少しずつしていたのですが、

1 年以上、村に住み込む調査をしたのは 2000 年からです。一般的には、外国籍であると、このような農村での長期住み込み調査は難しいのですが、こちらにいらっしゃる周星先生が、私の先生でして、周星先生がとても適切に調査計画をつくってくださったおかげで長期調査ができるようになりました。

(スライド)

調査地は、ちょうど中国の真ん中で、標準時を測っている陝西省の関中平原の村です。最初に借りていた家が、この写真です。このような感じのヤオトン（土の中の家：窯洞）をつくっているところですよ。

(スライド)

この村にも、毎年、少なくとも 2 週間を 2 回やろうと思ひまして、今に至るまで続いていますので、約 19 年通い続けております。最初の 1 年、次の半年はずっと住み込みで、その後は毎年通いの調査をしています。最近では、この村での調査から得た発想で、お葬式会場「殯儀館」といいますが、そこに住み込み調査をしたり、農家の民宿「農家楽」に住み込み調査をしたりしました。

最近では、公園で広場ダンス「広場舞」の調査をしたり、スマホの調査、トイレや家電の調査なども始めたりしています。おそらく、今、笑われた方は、「何か変なことをやっている人だな」と思ったださったと思ひますが、実は私の関心は非常にはっきりしていま

す。全て私のなかでは強くつながっております。

村の調査からお話ししますと、最初は方言を聞き取ることができませんでした。例えば、向こうからやってくる人に、私が北京で習っていた中国語では「你去哪里？」などと言うわけですが、陝西省の方ですから、「Nia zei ada qi lie?」とか言うわけです。わからないのです。ですから、私の言うことは通じるのですが、相手の言うことがわからないという状況にありました。

そこで、まずは、文字の調査から入りました。村の人たちの家系図をつくろうと思ひまして、墓碑の調査をして一覧表をつくってみました。ここから親族が再構成できるだろうと思っていたのですが、結果的には失敗しました。これについては、後で時間があればお答えしようと思ひます。しかし、それが無駄だったかという、そうではなく、文字資料がどのようにしてつくられるのかという問題に、私は導かれることになりました。

それから、親族のだいたいのかたちもわかってきました。先ほど申し上げたように、私の調査テーマは、いわゆる教科書的な人類学のテーマとはやや異なる対象に思われるのではないのでしょうか。しかし、わたしは、その対象によって、学問領域を定義づけているわけではありません。方法と社会への理解の仕方というところで、学問を定義しております。検証としては、非常に雑駁に思われるかもしれませんが、私のなかでは非常に重要な、中国を理解するためのものを探してきたところです。その、最初の調査の段階で、徹底した親族の調査をしておくことは、日中ともに大変重要であることがわかりました。

(スライド)

これは2番目にお世話になっていたおばあちゃんの家です。この方は、纏足なんです。ですから、松葉杖でいつも歩いて、門の外に

行って、行き交う人とお話をしているという、そんなときでした。

右側は、その頃につくっていた調査メモです。私が聞いたものを書き出すと、村の人が「いや、違う」とか言って、横に直してくれたり、あるいは、「あの人の奥さんは、どここの出身で誰だよ」とか、どんどん書き込んでくれました。つまり、私が調査をしていますが、ある意味、共同作業でできているところがこの研究方法のポイントではないかと思ひています。

さて、このような日中の調査体験を通じて、体験的に共通するようなことを少し考えてみました。もちろん、フィールドワークという、私が体を使って、今、私がそこにいるという文脈に埋め込まれた調査ですから、一般化するには限界があります。しかし、この方法でわかること、理解に近づけることもあるはず

です。まず一つ目ですが、経験的に、どこか非常に、ある程度、小さな領域を囲って、その部分を徹底的にやり尽くす。特に、親族調査をすることは、非常にあとあと有効になることがわかりました。これは日本でも、中国でも同じだと思ひます。

私が中国調査を始めた段階では、「村から国家を見る」という設定が多かった。それはそれで正しいのですが、特に人類学が、ある意味、孤立した島研究みたいな比喩をされるなかでは、非常に正しかった見方だと思ひます。しかし、それでも手の届く範囲をやり尽くすと。実際に、やり尽くすことはできませんが、そういったものを目指していくことは、非常に大事なのではないかなと。このようところで、一度、長期の調査をしてみると、ずいぶんその後の認識と言うか考えるべきことが変わるかなと思ひました。

特に、人々の関係性ですね。親族や姻族、あるいは友人関係だったりとお金を借りる

ときは誰に借りるのか。家の鍵を預けるときは誰に預けるのか。麻雀をする相手は、誰なのか。どの話はどういう人にまでできるのか。そのようなところまで踏み込んで、一緒にいつもくっついて、できれば、あまり賢くないやり方でおこなうことが大事ではないかと。つまり、こういうことです。フィールドに行くと、私は何回も同じことを聞きます。しかも、毎年、聞きます。そうすると、フィールドの人たちは、「あなた、北京大の博士学生だというのに、何回教えてもわからないし…」と言うわけです。

しかし、同じ文脈でないなかで、いろいろ繰り返し聞いていくと、単なる事実関係だけでなく、認識といった部分まで、逆にわかることもあるわけです。ですから、このようにあまり賢くない調査がもたらすメリットもあります。

(スライド)

親族の集中的な調査から始めると、その後、村の調査を通じて、ある程度、いろいろなものが見えてくる段階があります。それを発展させていくと、村で得た着想から、さまざまなテーマにつながっていき、村の研究だけでは理解できないより大きな問題系の研究となり、その問題系の研究により、さらに農村での経験に、より統合的な理解が得られることもあります。

それから、どこかの村で、一度、長期の調査をしたほうが良いというのは、次の問題、通い込むことも重なるのですが、その調査地について責任を感じる。このような、ある種の連帯感や責任を感じることは、とても重要なのではないかと思います。私たちは、単発の調査もできます。しかし、何かを聞いて、それを報告して終わりというような調査よりは、関係が長引いていく。そのことは、すなわち自分が発表をすることにも、あるいは、

その後も、ある程度の責任を感じる必要があるかなと思います。

(スライド)

このような感じで、村の調査から始まった問題意識から、現在ではいろいろ調査をしています。

(スライド)

最近では、ドイツのハンブルクに行って、中国系の人たちの組織の活動、老人ホーム建設運動などを調べたりしています。アメリカでは、これはハワイですが、中国系の方の最大の墓地があるので、調査に行ったりしていますが、拡大しすぎて最近ではそれぞれに毎年通うのは困難になってきてしまいました。

2 点目は、長期にわたって通い続けることです。通い続けることによって、観察によって変遷を追うことも可能です。どのようなものを人々は取捨選択しているのか、価値観などといったものを、民俗誌的現在というように限定して、本質的に語るのではなく、変遷のなかで考えることもできるだろうと思われるわけです。それをするには、日本と中国の人類学は、頻繁な往来が可能と言う、人類学の中でもかなり特殊な条件にあります。

(スライド)

最初に長期住込みをさせていただいた農村はこのような感じで、最初の頃、私にいろいろ教えてくれた人たちは、この写真のような方々でした。

(スライド)

この頃から、異文化であるところの私にとっては、中国の農村の家具とか、いろいろな道具が非常に面白かった。メモを取って、簡単な記録をつくって、一覧表にしていました。そういうものをつくっておくと、もう調査開始から約 20 年前ですので、そうするとモノがどんどんこうやって変わってくるわけです。これは 2012 年ですが、もう今はさらに、テレビとか大きくなったり、液晶になったりして

いますので、どんどん変わってきます。わたしがこの農村とかかわってきた20年は、まさに大量の物質文化が農村に流入した時期でもありました。しかし、実際に買い替えて使っている人たちは、既に細かくは覚えていないのです。ですから、逆に、私が参与をしてつくった資料などを、皆さんに見せると、「ああ、そういえば、そんなことあったよね」といったような資料として役に立つこともあるわけです。

(スライド)

これは台所ですが、この村に関わり始めた当初はこんな台所でした。

(スライド)

三つ目には、先ほどの劉先生のお話にも出ていましたが、日本でも中国でも、やはり、非常に変わったなと思うのは、「知」の回路です。これを視野に入れていかないといけないのかなと思います。

(スライド)

例えば、これは先週、佐渡ヶ島の知り合いから来たメールです。定期的にEメールで槍としているのですが、「今年は、台風が来たから坪刈りしてどれくらいのこと……」みたいな話をしてくれると、私はモノを知らないのに、「坪刈りってなんですかね？」みたいに聞くわけです。そうすると、いろいろ教えてくださるといった関係を20年くらい続けています。

今度のメールには、面白かったので持ってきました。「今度、本を書こうかな」と現地の知り合いがおっしゃるわけです。「お前が、こんなに聞くのは面白いからだろう。これは価値があるのかもしれない。だったら、私、ちょっと本を書こうかな」と。ある意味、これは、Pierre Bourdieu の言うような、現地の人々の社会学者化ですが、そういったことも起こって、それが以前よりは容易に可能になる状況がありつつあるわけです。

(スライド)

こちらは、私が毎年、広場舞で入れてもらって踊っているグループの大媽を仕切っているおばちゃんからの Wechat ですが、日本でデータを整理していて「あの手上げて踊る動作ってなんだっけ？」みたいに聞くと、すぐに答えてくれる。このように連絡を保ち続けられることがあったりします。電話で聞いたり、Eメールで聞いていた時代よりも、新たなメディアとその普及によって、格段にハードルが下がった、距離が縮まっています。

これは、ただ単にフィールドの問題というのではなく、「知」の往還の在り方が変わってきていることを含めて考えていかなければいけない問題だろうと思います。

(スライド)

一方で、日中の農村調査で差異を感じるの文字資料です。これは佐渡の「帳箱」というものですが、日本にはさまざまなかたちで、家、地区や農村などに資料が保存されていて、文字資料にあふれています。調査記録も多いですし、現地の物好きな人たちも、かなりいろいろ資料を作っています。

しかし、一方で、中国に行くために、歴史学の先生に、日記の読み方など、いろいろトレーニングを受けて教わってから行っただけですが、中国の農村では文字資料が非常に少なかった。文字資料自体が少ないというよりも、日本より相対的にという意味で少なかったです。気になったので、家にある文字資料のほとんど、土地改革の際の「土地房産所有証」から子供たちの教科書などまで集めたりしました。あるいは、儀式の式次第や村の公示など一時的につくられて捨てられていくような資料まで、いろいろと集めました。

(スライド)

村に貼られる広告なども、端から写真を撮っていきました。しかし、その過程で文字資料ばかりを追い求めるより、その文字資料が

どのようにして出来てくるのかと、なぜ人は文字にして残すのかというプロセスも考えなければいけないように思われました。つまり、文字資料が少ないことは、決してデメリットではなく、新しい方向へ考えを向ける機会だろうと思うわけです。

(スライド)

先ほどのメディアの話に関連して言えば、しかし、こうした以前の状況から急速に、非常に大量にブログなど、以前であれば非公的な、私から見れば生活世界をうかがわせる様々な情報が中国でも増えており、大きな変化が現在の中国のフィールドでは起こっているのだらうと思いますので、この状況を人類学的に以下に考えてゆくかという試みも必要でしょう。また、同様のメディア技術の導入にも関わらず、その影響や使用法などが異なっている。ここに挙げたものは一例にすぎませんが、日中両社会で研究を進めることで、同様に進行する技術に対して、部分的あるいは根本的に異なる様相をそれぞれ視野に収めることができる、違う言い方をすれば、多様な可能性を考察できることは、大変興味深いことです。

(スライド)

これが最後になりますが、「3」の部分になります。このような中国の状況と日本の状況を比べながら両地域で研究をしていると、少し気になることがありました。私が所属している「日本文化人類学会」の会員数が1,877人。これは最新の名簿の数字です。これが多いか、少ないかというのは難しいところですが、「World Council of Anthropological Association」に加盟しているのは、世界14カ所の人類学会です。そのなかで、「American Anthropological Association」が非常に巨大で、1万人以上の会員がいます。

しかし、2番目はどこかといえば、おそらく日本だと思います。大きいことで知られ

ている「European Association of Social Anthropologists」を調べてみると、会員数は1,580人です。そして、64カ国に点在している人たちが会員になっている。こちらは、64カ国から集めても、これだけしかいないのです。日本の場合は、主に国内だけで1,877人で、世界的に見ても巨大な組織です。会員がどういった対象地域をしているかという点、一番多いのは日本の938人です。次に多いのは、東アジアの461人。他の分類のカテゴリーを見てもらうとわかるように、「東アジア」といっているのは、ほぼ中国と韓国です。それを考えると、日本では、さまざまなかたちで中国や韓国への関心が高く続いてきました。学会誌の論文からもこれはいえるのですが、そのなかには、おそらく、1935年頃の論文など読んでみると、間違いなく、ある種の植民地主義的な関心などもあったわけです。しかし、そのようなさまざまな時代ごとの関心の偏重はあるにせよ、中国への関心は続いていて、「人類学」という現地調査をしないとほとんどできない学問の世界において、その現地調査が基本的に不可能な時代にあっても我々は関心を持ち続けてきました。

さて、これだけ人類学者が日本にいるわけですから、中国にも関心を持っている。しかも、日本国内のこともやっている、と言っている。どの程度やっているかは疑問もあるかもしれませんが、一番多くなっています。ですから、もし中国にも同じように、たくさんの中国研究をしている人たちがいるとすれば、これはもしかしたら面白い現象になるのではないのでしょうか。

(スライド)

面白い現象と言うのは、こういうことです。現在、人類学の世界では英語化が進んでいます。英語によって発表するものが学術論文と認められているようなかたちになっています。これが進んでいくと、ちょうど真ん中に円が

あるようなかたちに、英語を中心に、英語を介さないと他の言語にたどり着けないような世界が、もしかしたらやってきてしまう。すくなくとも、近づいていることは間違いありません。

それに対して、中国と日本のお互いの研究を進めていく。相手の言語で、それぞれに研究を進めるかたちの研究が進むと、右側の図のようになります。まだ右側の図では足りなくて、本来は、それぞれの言語間に全て線を引かなければいけないのですが、このようなそれぞれの言語間に非常にフラットな関係を築く可能性があると思われるわけです。国内にそれぞれ大きな自国言語の学術空間を持つにいたった中国と日本とでは、それが先駆例として実現できる可能性がある、と考えられます。少なくとも、特定の一言語のみが世界共通の学術用語を名乗るような状況を相対化できます。

さて、おそらくは、そのようなことを考えて、日本文化人類学会でも国際化に関する人類学の研究会をした後、第3回目からは全て東アジアの研究取り上げています。ですから、学会においても東アジア研究は重視されていますが、私が見たところ、まだ十分でないと思われる部分があります。それを述べてこの発表をおしまいにします。

一つ目は、お互いに学び合うというシステムを構築していかないといけない。私が留学をしているときに、中国の大学院生に「日本の研究者もそうだし、欧米の研究者も、中国の大学に留学にやって来るけど、目的はフィールドワークで、大学では中国の学問を勉強しない。お前たちは、私たちの場所をただの調査地と見ているのだから」と言われました。わたしは、結構、当たっていると思って、胸にズキッと、今でも刺さっています。フィールドの人々から教えられるのと同じように、その訪問先の国々で、その国の学問とそのあ

り方を勉強するのは当たり前の姿勢ではないでしょうか。それをしっかりとおこなう。相互に学び合う関係を確認する必要があると思います。

それから、日本側は、学会の名簿通り、日本の研究をしている人が多いのであれば、中国からやって来る、日本に関心がある研究者たちをしっかりとアテンドする仕組みをつくるべきです。それが無い限りは、中国から日本に関心のある人々が来たときにも対応ができない、残念なことになるでしょう。これは、もちろん中国からの来る人類学者だけのためではないのですが、現在、日本研究のために訪日する研究者に十分な研究の機会が提供されているでしょうか。

現在、両国間の人の往来も容易になり、交流は頻繁になっていますが、だからといって両国間の学問が自動的に発展するとは限りません。中国国内で、学問的なトレーニングを受けた人材を、ある程度、計画的に派遣してもらったり、こちらからも同じく計画的に育ててゆくなどして、両国で活躍できるような研究者を育てていくことが、今後必要になるのではないのでしょうか。呉文藻氏の時代のように、先見の明がある人物がその才能を用いて個人でそれを進めてゆく、というより、今後は、組織的に、こうした交流を続けてゆく必要があるのではないかと、それが私の提案です。以上、ご清聴どうもありがとうございました。